人と人との壁を越えて

笛吹市立一宮中学校三年　奈良　心希

「人は皆平等である」これはほとんどの人が学んできた言葉で、共感している人が多い。私もその一人である。しかし、実際に人と平等に接することができているだろうか。私を含め、多くの人が無意識に、人と人との間に壁を作ってしまっている。

私は、家族と旅行へ行った時、白いつえを持った視覚障害者の男性が歩いているのを見かけた。つえを左右に必死につきながら、ブロックを探しているようだった。途中で、置いてある自転車にぶつかったり、壁に当たってしまったり、人とぶつかりそうになったりしていた。何度も同じところを行き来している時もあった。とても困っている様子だったのは、傍から見ても分かった。しかし邪魔だったのか、歩行上にいたからか、その男性をにらみつける人、面白そうに見ている人、分かるように舌打ちしている人などがいた。だが、ほとんどの人が見て見ぬふりをして、素通りしていった。私も気の毒には思ったが、どうしていいか分からず、助けることはできなかった。誰かが手を貸せば解決していたことなのに、私を含め、誰も手を貸すことをしなかった。

なぜこのようなことになってしまったのだろうか。「何をどうやって助けていいのか、助け方が分からなかった、勇気がなかった。」というのが正直なところだと思う。もし声をかけたとして、助けを拒否されたら、上手く手助けができなかったら、自分が深く傷つけてしまう、余計なことをして傷つきたくない、相手も傷つけたくないという気持ちが強く、勇気が出なかった。

今社会では、障害者と健常者の壁を作らないため、段差をなくす、スロープを設置する、手すりを設置するなどのバリアフリーの取り組みが盛んに行われている。だが、それを何とも思わない人、見下す人がたくさんいるのが現実である。なぜ、そのような考えになってしまうのか。おそらく、自分の生活で頭がいっぱいであったり、周りを全く見なかったりする人が多いのではないかと思う。

私は、障害があってもなくても、それぞれの立場があるということを伝えたい。人間はそれぞれ違う悩みを持ち生きている。だからこそ、できない人は劣っていると認識するのは間違っているし、優劣をつけるものではない。様々な面があるから人間なのであり、一人として同じ人間はいない。それぞれの立場

を理解することが大切なのである。小さなことでいいのだ。笑いかけてくれたら笑い返し、困っていたら手を差しのべる。少しの勇気でいい。「助け方が分からない。」そんな時は、相手の置かれている状況を聞くことが大切だ。「助けられることはありますか。」と声をかけてみること。それは、決して大したことではないと思う。ちょっとした心の余裕や、思いやりによって叶えられていくものではないかと私は考えている。「障害者だから誰かが守ってあげないといけない。」「健常者だから自分のことは自分で守らなければいけない。」ということもない。障害者が健常者を守ることもあると思う。お互いがお互いを思いやることが大切だと感じた。

私は道徳の授業で障害者と健常者で共に仕事をすることについて学んだ。初めの内は作業着に着がえることもできず、仕事も行えず、食事をこぼしてしまい、それを片づけることさえもできなかった。だが、教える立場の健常者は諦めず、一つ一つゆっくりと教えることを心がけた。するとだんだん上達し、共に仕事を支えていく仲になったそうだ。私はこの授業を聞き、障害者も健常者も関係なく支え合うことができると知った。また、物語はさらに続きがある。障害者の母親から手紙をもらった。その障害者は、今まで着がえも食事も手伝いを必要としていたが、最近では自分で頑張っている。教えてくれている人に感謝している。これからもよろしくお願いしたい。といった内容だった。私は障害者のみならず、家族を支えることが大切だと思った。障害者が社会で生きていくために、家族の支えが大切であり、足がかりとなるのだ。

この道徳で私はもう一つ学んだことがある。壁を壊すためには、相手を知るということ、焦らずゆっくり関わることが大切だということだ。そして、その一歩は、一人が踏み出しただけでは意味がない。多くの人が、障害者、健常者の壁を壊していくことが、「人は皆平等である」ということにつながり、共存し合い、人権を守ることになると私は信じている。この世に生きる全ての人々が持つ、普通に過ごし、普通に生きる権利を、障害の有無に関係なく、当たり前にある世の中になってほしいと私は願っている。